

じてある。第二節はもと／＼さう大量でないマルテの方法論的著作をかなり忠實に辿つてあるので、いはゞ反覆してあるので、にも一度シュベートマンの説述を抄してマルテの反覆を二重にするのは差ひかへておく。別に機會もあらう。

リッターの地理學の定義を説くに際して屢々物的充填なる語が引合に出されるが之が實はマルテの使用したものであることがシュベートマンの論述から判斷することが出来るのも少らず愉快である。リッターはイルデイツシュなる語を用ひてゐるのみなのでこの間の事情に疑念が挿まれるからである。マルテは創造的な才をもつてゐたとシュベートマンは云つてゐるが、殊に造語といふ點に於ては極端にそれを發揮してゐる。彼の文章が少からず難解なもの一つには之が爲だらう。コロゲラマイ・コロ、ギ・コロソフイ・ジンコリスムス等々まだこの同一語根から作出した語があり、その他の種類に至つては列擧に堪へない。唯シュベートマンは「動的地誌」の著者であるが、これも語のみならず概念内容もマルテを受つてゐるものであることはかなり興味があることだ。何故マルテがかくの如くしてしかも後世に忘却されたかについてはリヒトホーヘンと奇妙な關係にあつたから、しい。リヒトホーヘンは今日の地理學者が大方直接にその系統をひいてゐるのだが、「支那第一卷」でもライプテツヒ大學就任演説でもマルテと覺しきものを指しながらその名を擧げてゐない。殊に彼の所説はマルテの影響を受けてゐることは疑もない事實でいはゞマルテを多小淺薄に誤謬多くしたものだといつてもよい。リヒトホーヘンは

もつと別の領域に本當の任務をもつてゐた人だからこの位に言つても別に彼に對して不當ではない。彼を現代地理の理論的部面の直接の父祖の様に取扱つてしまつた後人こそ不當なのであるから。その他のより重大な事實からマルテとリヒトホーヘンとの關係が妙なこぢれたものであつたらしいことを推論してゐるのあたりがシュベートマンの小著の一重點であらう。かくてマルテはリヒトホーヘンの巨大な名聲の蔭にかくれてしまつた。後人は誰もマルテまで溯らうとせぬが、リヒトホーヘンの功績のうち地誌學の建設は實はマルテの負ふべき名譽だつたのである。但しマルテの「地理學の概念目標並にその方法」とリヒトホーヘン「支那第一卷」なる論文は老大な「支那」についてよい紹介であることは斷つてをく。シュベートマンがマルテを擁出してゐた以上我々も彼を抹殺せぬ様注意せねばなるまい。マルテを取出したのは彼が自己の「動的地誌」の援兵とする爲だと考へるのは意地が悪すぎることだらうか。ついでのことにその他の不當に忘れられてゐる人々を發揮してほしい。さしあたりキルヒホフなどもその様な一人ではないか。(時價一・二〇圓)(野間)

○Nicolas Berdyayev: The Meaning of History. (1936)

著者ニコラス・ビエルディアエフの名は、「ルネサンスの終末」(一九一九年)・「新しき中世」(一九二三年)等の論文を収めた「The End of Our Time」(佛語版・一九二七、英譯一九三三年)

によつて、すでに吾國にも知られてゐる。西歐文化に對する、その深く鋭い洞察とそのユニークな思想は、現代の思想的危機の中に在つて、限りない魅力を吾々に與へたものであつた。このやうな思想が、歴史の問題を問題とするとき、對象は如何に取扱はれ、どのやうに論ぜられるものであらうか、——これは吾々にとつて興味ある疑問でなければならぬ。それ故、同じビエルディアイエフが歴史の問題を真正面から取上げてまとめた著作が、吾々にも理解されうる言葉に翻譯されたことは、兎に角、吾々の關心の外にある事柄ではあるまい。

ビエルディアイエフによれば、「近世史の内在的指導精神は——十五・六世紀のルネサンスに生氣を吹込み、且つ近世史の全體を通じてさうしつゞけて來たものであるが——それはヒューマニズム精神であつて、これこそ、あらゆる近代概念の根柢に横たはれるものである。ヒューマニズム時代の始は、近世の始と一致する」(一三九頁)。しかし「ヒューマニズムは、種々の段階を經過した」(一四二頁)ものである。ルネサンス期、宗教改革期、十八世紀の啓蒙期等はその夫々の段階を示すものに他ならないが、(一四二—一四八頁)、しかしヒューマニズムは「例へばドイツ・ルネサンス及びゲーテの個性に於けるが如く、純粹に人間的な平面上に身を支へるとき、それが發展と創造力の最高頂點に達することは明かである」(一四九頁)。

それ故、もしマイネッケの云ふやうに、歴史主義の出現が、曾て西歐思想の經驗せる最も偉大な精神革命の一つであり、第十八

及び十九世紀の精神史が廣く歴史主義の歴史であるならば、歴史主義とは、要するに、ビエルディアイエフの所謂ヒューマニズムの、最高の——或は最後の——段階に他ならないであらう。従つて、現在史學思想に於いて最も多く問題とされてゐる歴史主義及びその危機の問題は、ヨリ廣くヨリ根柢的な觀點に於いては、一般にヒューマニズム及び之を基底とする西歐近代文化とその破綻の問題として把握されることが出来るであらう。ビエルディアイエフの著作が特に吾々の注目に價する理由は、全くこゝになければならない。

勿論、ビエルディアイエフ自身が直接歴史主義の問題を論じてゐる譯ではない。また最近の歴史思潮について彼一流の批判を下してゐるでもない。然し、これは著者の怠慢の爲ではなくて、本書の成立が今から十數年前にあるからに他ならない。吾々は、カール・ホイシイの「歴史主義の危機」の公刊が漸く一九三二年のことであつた事實を想ふべきであらう。本書の英譯者ジョージ・リーヴェイの云ふ如く、著者がファッソムの如き社會現象を取扱はず、また歐洲美術の最も新しい表明として、フェーリチュアリズムを以て止めてゐる如きも、ともに同じ理由から説明さるべき事情であつて、決して本書の眞價を傷けるものではない。

内容の一端を紹介する煩を避けて、次に目次を掲げておきたい。

- 一、歴史的なものゝ本質に就いて、傳統の意味。
- 二、歴史的なものゝ性質に就いて、形而上學的なものゝ歴史的なもの。

三、天上の歴史について、神と人。
四、天上の歴史について、時と永遠。

五、ユダヤ族の運命。
六、クリスト教と歴史。

七、ルネサンスとヒューマニズム。

八、ルネサンスの終末とヒューマニズムの危機、機械の出現。

九、ルネサンスの終末とヒューマニズムの危機、人間のイマージの崩壊。

十、進歩の教説と歴史のゴール。

(エピローグ)、生への意志と文化への意志。

此の中、本論の十章は、一九一九―二〇年にモスコの精神文化自由アカデミーに於いてなされた講演をまとめたものであり、エピローグのみは、一九二二年に附加へられたものであつて、これは著者自身の云ふところに従へば彼の「歴史哲學構想の本質的要素をなすものである」と云ふ。

少くとも私自身について云へば、本書が極めて *sostrich* であり *interessant* なものであるだけに、その魅力に引きつられてむしろ讀まされたかたちである。英譯者の譯文もまた流暢であつてと云ふほゞごころを知らない。(Geo. Rey Berg: *The Contemporary Press*, London, 1936, pp. X et 224. 邦價約七圓餘。(中山))

○ラヴィス 歐洲政治史概観

小島幸 治譯補

この書物の原書である Lavisse: *La vue générale de l'histoire politique de l'Europe*. 1870 に就いては今ごと新らしく紹介する必要はないであらう。譯者もその序文で述べられてゐる如く *Ranke* の *Ueber die Epochen der neueren Geschichte* とともに西洋史概説書中の古典的名著であらう。我國に於いても、既に古く廣瀬哲士氏によつて「歐洲政治史概論」(大正六年東京)として譯出せられてゐる。然し今新らしく刊行せられたこの小島氏の譯書では佛文原典のみならず *Charles Gross* の英譯本も参照され、加ふるに原書をテキストとして用ふる専門學生の參考のために、或は又一般讀者の理解を資けるために、懇切に詳細な補註が附加せられてゐる。

ラヴィスのこの書は、その叙述が世界大戰以前に止まる古きものであり、個々の歴史事實に關しては、その後の研究によりて修正さるべきものを含んでゐるであらう。しかし、その簡潔にして明晰な表現の中に複雑多岐なる歐洲政治史の本質が壓縮して把握せられてゐる。即ちそこには「世界史の根本的事實が與へられつゝ、歐洲諸國家の形成と政治的發展」とが實に鮮かに示されてゐる。

われ／＼が今直面してゐる緊迫せる複雑な現實の情勢は、一つには國際事情の動向に關する全き理解と、他方には歴史の進行に